

発信「私の姉はボッチャの選手です」  
雲南市立大東中学校 2年 立石雄飛

あなたは障がい者についてどのようなイメージをもっていますか。

私には五つ違いの姉がいます。姉は脳性麻痺のため生まれつき手足に障がいがあります。私は小さい頃から「なぜ、私の家族には障がい者がいるのだろう。」と、障がいのある姉や家族に対してマイナスのイメージをもっていました。

姉と一緒にショッピングセンターへ出かけた時のことです。姉の車椅子を押して歩いていると、心なしかすれ違う人たちが、見てはいけないものを見るような、避けるような視線を送ってきます。次第に私の心には「障がい者と一緒にいると嫌だな。」という気持ちが増してきました。姉のことは嫌いではなかったはずなのに、一緒にいると「障がい者」という同じくくりで見られているようで嫌でした。

また、当時、姉はその障がいからか、何もしていない私を見て馬鹿にしたように笑うことがありました。私が怒ると、逆に大きな声で泣き出し、それが一時間余りも続いたりしました。こうしたことが重なり、とうとう姉と大喧嘩になり、それがきっかけで私は次第に姉と話さなくなりました。やがて姉は養護学校の寮で生活するようになりました。以来、私の心には、姉が寮に入ることになったのは、私とのいさかいが原因なのではないかというわだかまりのような気持ちが残りました。

ある日、私は母と一緒に、姉が勉強しているようすを参観しに養護学校に行きました。すると、姉より重度の障がいのある子どもたちがたくさんいました。最初、私は驚き、かつてのショッピングセンターのお客さんたちのように、この子たちから目をそらしていました。しかし、何度もこの養護学校を訪れ、子どもたちが職員の方々や家族から介助を受けながら一生懸命に生活している姿を見ているうちに、私の中に後悔の気持ちが大きくなりました。今まで、私は心から姉の介助をしたことがありませんでした。それどころか、家族の中に障がい者がいることを恥ずかしく思い、そのため姉に辛くあたっていました。しかし、養護学校で、優しく声をかけながら介助をしておられる多数の家族の方々に接し、家族の中に障がい者がいることは決して特別なことではない、私もあんな風に姉を支えなくてはいけないと思うようになりました。

今夏、東京パラリンピックが開催されました。私が関心をもって見ていた競技の一つに「ボッチャ」があります。ボッチャはカーリングに似た競技で、六個のボールを順番に投げて、白いジャックボールにいかに近づけるかを競う競技です。今大会、

杉村英孝選手が金メダルを獲得したことは記憶に新しいことと思います。私がこの競技に関心を持っているのは、今年六月、姉が島根県スポーツ交流会ボッチャ座位の部に出場したからです。姉がこの大会に出場したのは三回目、個人戦では初挑戦ながら二位に輝きました。私は、母と一緒に松江市総合体育館へ応援に行きました。姉は腕を上げたり、ボールを握ったりすることが難しいので、ランプという道具を使って指と言葉でボールを動かします。私と母は一生懸命応援しました。姉はもちろん他の選手も、技術面はもちろん、一球に対する集中力がすごかったです。また、戦略面でも本当によく考えているなど感心しました。姉や会場のみなさんから元気と勇気をもらった一日になりました。

今、姉は、養護学校を卒業し、障がい者支援施設で生活しています。時々しか会えませんが、私の大切な大切な家族です。かつて、私は姉が障がい者であること、家族の中に障がい者がいることが恥ずかしいことだと思っていました。しかし、様々な人たちと出会い、何より姉の生きざまに触れ、それは間違った考え方であったことがわかりました。私も姉に支えられ、成長させてもらっていたのです。

私は、障がい者について、もっとたくさんの人に関心をもってもらいたいと思います。障がい者と言っても、私の姉のように生まれつきの障がい者もいれば、事故や病気で、あるいは高齢になり人生の途中から障がい者になった人もいます。また、障がいにも程度の違いがあったり、内容の違いがあったりします。私は、障がい者は決して特別な人たちではなく、同じ社会の中で一緒に生活している身近な人たちであると思います。そのことを私は姉から学びました。みんなが障がい者について正しく理解し、誰にとっても住みよい社会になるよう、今後も姉から学んだことを発信していきたいと思います。そして、これからは堂々と言います。

「私の姉はボッチャの選手です。」

と。